



# 陸上分科会情報



## 武蔵野大会・1日目：基調提案

参加者は9名でした。初参加の学生が2名みえたため、これまでの研究の歩みを動画を交えて紹介しながら振り返りました。

基調報告した先生は、『私は、過去の自分のような「うまくできない」「どうしたらできるのかがわからない」という子どもたちを作りたくないという思いで本分科会に参加しています。ここでの議論は時に難しい内容もありますが、どこまでも科学的で、実際の子どもの姿から学ぼうという視点が全くぶれません。まさに同志会らしい分科会』と述べています。

私たち陸上分科会では、基礎教材を低・中学年では「障害（物）走」、高学年以上では「あてっこペース走」と考えて実践・研究に取り組んできました。近年の分科会では、「4歩のリズム走」におけるスピードの「安定と変換」の実践と並行して、小学生での持久走・中学生での長距離走での新たな展開が行われてきました。そして、昨年度から、投運動の実践も加わっています。



## 実践報告

1本目は、岐阜の中学生・長距離走の実践報告です。

理科と保健と関連付けて、運動する時に自分の体の中で起こっているメカニズムを理解します。運動の苦手な子どもでは、タイムは遅いのに心拍数は簡単に200拍/分を超えるのに対して、長距離をやっている子どもでは、タイムは速いのに180拍/分という興味深い報告がありました。Y先生から『生

理学的には、「心拍出量 = 1回

拍出量×心拍数」ですので、運動が苦手な子どもは運動経験が少ないのでその関係がうまくゆかず心拍数のみ勝手に上昇している

（いわば空ぶかし状態）のではないかと、長距離の子どものその関係を体験しているので適切な心拍数になるのではないかと話がありました。コロナ禍で思うように実践が進まず、次年度も再チャレンジしてください。

2本目は、京都支部の小学校2年生の動き体験とその表現方法の実践報告です。子どもたちの反応や行動から心理を読み取ったり、なぜ嫌がるのかを考えたり、コロナ禍で育ちそびれた子ども達の体と心に着目し、丁寧に実践を進めてこられたことがわかる実践報告でした。

来年度は、今年2日目の実技で体験して興味が湧いた「投運動」に、陸上分科会のメンバーで取り組むことにしました。「子ども達が投げたくなる仕掛けをしていきたいね」と、実践への意欲を高めた3日間でした。

## みはま大会では・・・

前年度のテーマを引き継いだうえで、目の前の子ども達の様子や気持ちを大切にしながら研究を続けています。疑問に思ったことは話題にあげ、みんなで検討を重ねてきました。「教師も子どもも夢中になれる」「やってみよう」、そんな陸上運動（含む：体づくり運動）の授業づくりをめざしていきたいと思います。